

地域ニュース

1971年、英國の神経
内科医スピレーンらが、医学雑誌『Brain』において初めて紹介した症候群であり、片側ないしは両側の下腿・足の焼けるような、うずくような持続的な痛み、痺れるような不快感、足の指の不随意運動（意図していないのに出現する動きで、意図して止めることができない）を、特徴とする疾患である。足の指（特につま先であるが、

「痛む足動く趾症候群」とはいって、違う変わった病名ではあるが、「painful legs and moving toes」を直訳したものである。別名で「痛む足動くつま先症候群」とも呼ぶ。

痛む足動く趾症候群



足の指がくねるようにならへ

「痛む足動く趾症候群」足首にも起らることがある(をくねるよつな、かつてある)をくねるよつな、かつてある。も真も真であるが、「p a i n f 伸ばして曲げてといったス u l l e g s a n d テレオタイプの連続的な運動。男

動が続く。真似ようと/orして
も真似できない動きであ
れ、中年～高齢者に発症
し、数年間続くことが多
い。当初は下腿よりも下位
の深いところに痛みや痺れ

では「舞踏病」に伴うこと
が多い)がある。このアテ
トーゼでの不随意運動は足
だけではなく、手や顔面に
もみられ、不規則にゆっく
りと絶え間なく続ぎ、一定
の姿勢を保つことが不可能
となる。精神的な緊張、隨
意運動によつて強くなるこ
とが特徴である。

卷之三

卷之三

APRIL 1911

卷之三

では「舞踏病」に伴うことが多い)がある。このアーティゼでの不随意運動は足だけではなく、手や顔面にもみられ、不規則にゆづくりと絶え間なく続き、一定の姿勢を保つことが不可能となる。精神的な緊張、随意運動によって強くなる」とが特徴である。

治療には、抗てんかん薬のクロナゼパム(リボトリール、ランドゼン)、ガバペンチン(ガバペント、筋弛緩薬のバクロフェン(リオレサール)などの処方が行われている。

感を感じるのみであるが、徐々に不随意運動を伴うようになる。なお、足の輕度な怪我、帯状疱疹や単純疱疹、腰椎圧迫骨折、脊髄異常、アルコール性多発ニューロパシーなどに伴つて発症したとする報告もあるが、その原因は未だ不明である。

よく似た症状を示すものは「アテトーゼ」(小児では「新生児無酸素脳症」、「核黄疸」でみられ、成人

一方、本症候群ではむしろ逆で、精神的緊張で抑えられ、随意的に数秒～数分間なら止めることが可能である。両者ともに不随意運動は睡眠時には起こらない。

「むずむず足症候群」
(restless leg syndrome)

私も、本症候群と考えられる患者さんの治療を経験したことがあるが、さほどまな検査でもまったく異常はなかつた。腰部硬膜外ブロックや腰部交感神経節ブロックでは一時的な効果を示すのみであったが、脊髄刺激療法により痛みと不随意運動は軽快した。

よく似た症状を示すものに「アテトーゼ」(小児は「新生兒無酸素脳症」、「核黄疸」でみられ、成人

と呼ばれる疾患でも不随意運動を生じる。この場合に通常、両足（手にみられることがある）に起り、

次回は1月19日に
掲載します。

次回は1月19日に
掲載します。

次回は1月19日に

次回は1月19日に
掲載します。